

# 医療器具用を収益の柱に

1970年、東京都内で始めた小さなばね屋が前身。自動化による大量生産体制を整え、10年後、株式会社化した。製品の用途は自動車からボールペンまで。経営が安定した2007年、井上英博社長(50)は、創業者の父廣里会長(76)からかじ取りを託された。携帯電話「ガラケー」の部品としてばねが売れ、生産量は

## 中央ばね工業



井上英博社長

年間4億個に。だが1年後、リーマン・ショックの激震が走った。需要は激減し操業は週5日から4日に減り、売

目を付けたのが、狭心症や心筋梗塞といった心

臓手術などの際に、血管に挿入されるカテーテルを導く「ガイドワイヤ」(ステンレス製、長さ約1.1m、外径0.9mm)と

いう医療器具だ。職人の勘と技に頼り、均一の硬さで量産化するのが難しかったが、機械で硬さを数値化して課題を克服。収益の柱の一つにした。

今は、車への搭載が期待される燃料電池の部品で使う外径0.4mm、線径30μmの微小なばねの試作に挑戦している。井上社長は「他社がやらない方法で世の中に役立つ精密ばねを作っていくたい」と話す。

【橋本利昭】

ちばねのく

底力

り上げは6億円から約4割減の4億円弱に落ち込んだ。安価なばねの供給は海外に奪われ、それまでの大量生産体制から、高品質の精密ばねの生産など業態転換を図った。



ばねを製造する成形機が並ぶ工場内

中央ばね工業 本社・柏市高田1-11-6の29▽1980年10月設立▽従業員22人